

## マルコ 6 : 1-30 「イエスが弟子たちを拒絶体験に備える」

6:1 イエスはそこを去って、郷里に行かれた。弟子たちもついて行った。 6:2 安息日になったとき、会堂で教え始められた。それを聞いた多くの人々は驚いて言った。「この人は、こういうことをどこから得たのでしょうか。この人に与えられた知恵や、この人の手で行われるこのような力あるわざは、いったい何でしょう。 6:3 この人は大工ではありませんか。マリヤの子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではありませんか。その妹たちも、私たちとここに住んでいるではありませんか。」こうして彼らはイエスにつまずいた。 6:4 イエスは彼らに言われた。「預言者が尊敬されないのは、自分の郷里、親族、家族の間だけです。」 6:5 それで、そこでは何一つ力あるわざを行うことができず、少数の病人に手を置いていやされただけであった。 6:6 イエスは彼らの不信仰に驚かれた。それからイエスは、近くの村々を教えて回られた。 6:7 また、十二弟子を呼び、ふたりずつ遣わし始め、彼らに汚れた霊を追い出す権威をお与えになった。 6:8 また、彼らにこう命じられた。「旅のためには、杖一本のほかは、何も持って行ってはいけません。パンも、袋も、胴巻に金も持って行ってはいけません。 6:9 くつは、はきなさい。しかし二枚の下着を着てはいけません。」 6:10 また、彼らに言われた。「どこでも一軒の家に入ったら、その土地から出て行くまでは、その家にとどまっていなさい。 6:11 もし、あなたがたを受け入れない場所、また、あなたがたに聞こうとしない人々なら、そこから出て行くときに、その人々に対する証言として、足の裏のちりを払い落とさなさい。」 6:12 こうして十二人が出て行き、悔い改めを説き広め、 6:13 悪霊を多く追い出し、大ぜいの病人に油を塗っていやした。 6:14 イエスの名が知れ渡ったので、ヘロデ王の耳にも入った。人々は、「バプテスマのヨハネが死人の中からよみがえったのだ。だから、あんな力が、彼のうちに働いているのだ」と言っていた。 6:15 別の人々は、「彼はエリヤだ」と言い、さらに別の人々は、「昔の預言者の中のひとりのような預言者だ」と言っていた。 6:16 しかし、ヘロデはうわさを聞いて、「私が首をはねたあのヨハネが生き返ったのだ」と言っていた。 6:17 実は、このヘロデが、自分の兄弟ピリポの妻ヘロデヤのことで、——ヘロデはこの女を妻としていた——人をやってヨハネを捕らえ、牢につないだのであった。 6:18 これは、ヨハネがヘロデに、「あなたが兄弟の妻を自分のものとしていることは不法です」と言い張ったからである。 6:19 ところが、ヘロデヤはヨハネを恨み、彼を殺したいと思いながら、果たせないでいた。 6:20 それはヘロデが、ヨハネを正しい聖なる人と知って、彼を恐れ、保護を加えていたからである。また、ヘロデはヨハネの教えを聞くとき、非常に当惑しながらも、喜んで耳を傾けていた。 6:21 ところが、良い機会が訪れた。ヘロデがその誕生日に、重臣や、千人隊長や、ガリラヤのおもだった人などを招いて、祝宴を設けたとき、 6:22 ヘロデヤの娘が入って来て、踊りを踊ったので、ヘロデも列席の人々も喜んだ。そこで王は、この少女に、「何でもほしい物を言いなさい。与えよう」と言った。 6:23 また、「おまえの望む物なら、私の国の半分でも、与えよう」と言って、誓った。 6:24 そこで少女は出て行って、「何を願いましょうか」とその母親に言った。すると母親は、「バプテスマのヨハネの首」と言った。 6:25 そこで少女はすぐに、大急ぎで王の前に行き、こう言って頼んだ。「今すぐに、バプテスマのヨハネの首を盆に載せていただきとうございます。」 6:26 王は非常に心を痛めたが、自分の誓いもあり、列席の人々の手前もあって、少女の願いを退けることを好まなかった。 6:27 そこで王は、すぐに護衛兵をやって、ヨハネの首を持って来るように命令した。護衛兵は行って、牢の中でヨハネの首をはね、 6:28 その首を盆に載せて持って来て、少女に渡した。少女は、それを母親に渡した。 6:29 ヨハネの弟子たちは、このことを聞いたので、やって来て、遺体を引き取り、墓に納めたのであった。 6:30 さて、使徒たちは、イエスのもとに集まって来て、自分たちのしたこと、教えたことを残らずイエスに報告した。

## 導入

先月、マルコの福音書から、イエスがガリラヤ湖の嵐を静めたこと、男から悪霊を追い出したこと、難病を患う女性を癒したこと、そして、ヤイロの娘を死からよみがえらせたことを学びました。

これらを目撃した人々の反応は必ずしも好意的ではありませんでした。

イエスの偉大な力を畏れる人もいれば、イエスを信じる人もいました。

いずれにせよ、イエスはどんどん人に知られる存在になっていきました。  
イエスはどこに行っても、人々から敬われ、ひっぱりだこでした。  
イエスは故郷のナザレからは一年ほど離れておられました、帰郷して家族に会う時が来ました。  
低地のガリラヤからナザレへの道のりは、山登りと言っても過言ではありません。  
私はバスでその行程を旅しましたが、山道を上り下りしたのを覚えています。  
乗り物酔いのある人なら、車やバスでその道を通るのはたいへんでしょう。イエスはおそらく、  
徒歩かろばに乗って旅をされたはずで、  
日本人は、8月に地元や実家に帰る人が多いと思います。きっと、よい時間を過ごされることと思  
います。  
私のような外国人にとって、母国に帰るといrownなりアクションを受けます。けれども、たいて  
いの場合、家族や友人と会えてよい時間を過ごせます。  
「ふるさととは、ありのままの自分でいられる愛のある場所。錦を飾ってともに喜んでくれる場  
所。欠点を大目に見る理解のある場所。」と言った人がいます。  
ナザレへの道のりをどんな思いでイエスが進まれたかわかりませんが、人々から拒絶されること  
は想定しておられなかったのではないかと思います。  
自分の故郷で受け入れてもらえないとは誰も思いません。

### 1. イエスの帰省 (6:1-6)

イエスは故郷に帰られたときも、この一年間安息日にいつもしておられたことをなさいました。  
ナザレの会堂で教え始められました。  
地元の人々は、イエスがすばらしい知恵を与えられていることに驚きました。  
また、不思議な奇跡を起こす力がイエスに与えられていることにも驚きました。  
人々は、喜んだのではなく、気分を害したようです。  
彼らは、イエスが「ラビ」のようにふるまっていると感じました。  
当時のラビは、ユダヤ教のみことばを教える学者として尊敬されていました。  
イエスの故郷の人たちにとって、イエスはただの大工でした。  
当時の大工は、いろんなどころでこまごました仕事をする便利屋のようなもので、人から立派だ  
と思われるような職業ではありませんでした。  
それで人々は、何の資格もないイエスが帰省してラビのように教えたことに腹を立てたのです。  
そのような人たちに向かって、イエスは次のようにお答えになりました。

6:4 イエスは彼らに言われた。「預言者が尊敬されないのは、自分の郷里、親族、家族の間だけで  
す。」

5-6 節は、ナザレの住民がイエスを信じなかったので、イエスのご自身の出身地で大きな働きをす  
ることがおできにならなかったと語ります。  
それでも、イエスは何人かの病人に手を置いて癒されました。  
それでイエスは、周辺地域を教えて回ることになさいました。  
では、この歓迎されなかった帰省の話から、何を学べるでしょう。  
この個所のテーマは拒絶体験についてですが、イエスがなぜ故郷で拒絶されたのかを知るのが重  
要です。  
その理由は、2 節に注目するとわかります。

6:2 安息日になったとき、会堂で教え始められた。それを聞いた多くの人々は驚いて言った。「こ  
の人は、こういうことをどこから得たのでしょうか。この人に与えられた知恵や、この人の手で行  
われるこのような力あるわざは、いったい何でしょう。」

地元の人々は正しい問いかけをしました。

1. この人は誰か。
2. この知恵は何か。
3. その力はどこから得たのか。

人々が言っていたのはつまりこういうことです。

「イエスは人なのか、神なのか。」

イエスのことばは、人間の哲学でしょうか。それとも永遠の真理でしょうか。

イエスが奇跡を起こす力は神から与えられたのでしょうか。それとも、生まれつきの能力でしょうか。

その問いに答えが出るまで、イエスに信仰を置くことはできません。

そして、その答えが与えられた時点で、彼らはイエスをどう考えるか決めなければなりません。

それは、拒絶か信仰のどちらかです。

地元の人々がこのように問いかけたことは間違っていない。

しかし、正しい問いかけであっても、その姿勢が間違っています。

それは、イエスに対する偏見です。彼らの偏見が邪魔をして、イエスについての真実を知ることができませんでした。

イエスに対する偏見がイエスについての証拠を無いものとしてしまったのです。

地元住民は、イエスについての真実を知ろうともせずに、自分たちの問いかけに自分たちで答えを出してしまいました。

これは、私たちが生きる現代社会でも常に起こっていることです。

3節で、地元住民はイエスがマリヤの息子だという理由で、神であることを否定しました。

神の子であると同時にマリヤの息子であるはずがないと考えたのです。

これは、処女受胎の否定です。

イエスはただの大工で、神のみことばを教える訓練を受けたラビではない、という理由から、人々はイエスの教えも受け入れませんでした。

残念ながら、イエスに対する偏見が、不信仰の空気をもたらしました。

## 適用

私たちが生きる世の中は、ほとんどの人がイエスやキリスト教の信仰について偏見を持っています。

聖書、イエス、福音について考えが凝り固まっていて、真理を聞くことで混乱させられたくないと思っています。

そのような人たちに手を差し伸べるために、私たちには何ができるでしょう。

黒人のアメリカ人伝道者マーク・パーキンスから私はあることを学びました。

私が初めて彼と個別訪問伝道をしたときのことで。

彼は人々と話し始めるとすぐに、「キリスト教の信仰についてどんな考えを持っているか」と尋ねました。

また、その人たちが創造や生きることと死ぬことについてどう考えているか話してくれるように促しました。

そうすることによって、人は自分が何を信じているか改めて考えなければなりません。

無神論者になるのは信仰の要ることです。

こう言ったら、皆さんは驚かれるでしょうか。

創造主なる神が天地を創造されたという根拠はたくさんあります。

一方、ビッグバン理論や、細胞から動物そして人間への進化論などには、これといった決め手となる根拠はありません。

ある時、英国のラジオ番組で有名な科学者がインタビューを受けていました。この科学者はビッグバン理論と進化論の支持者でした。

質問コーナーのときに、クリスチャンがラジオ局に電話をかけてきて、次のように質問しました。

「先生、この世ができたとき、何がバンとなったのですか。」

すると科学者は沈黙しました。

その質問に答えられなかったからです。

なぜ答えられなかったかと言うと、何らかの物質がバンと爆発したと認めれば、ではその物質を誰かが作ったということになってしまうからです。

そうすると、創造主なる神を認めざるを得なくなります。

聖書の神に対する偏見を持っている人たちは、自分たちが信じていることを改めて見つめ直すチャンスが必要です。

自分たちの間違った信念を明文化することで、実は答えや真理にたどり着いていないことに気づいてくれればと願います。

現代人がイエスを受け入れない理由のひとつは、自分たちが何を信じているのかしっかり考えたことがないからです。

人が何を信じているのかしっかり聞いて、その内容をキリスト教の信仰と照らして考えてもらうのはよいことです。

そういう場面で、聖書暗誦が役に立ちます。

暗誦していれば、神のみことばである聖書のことばを引用して、すぐに答えることができるからです。

キリスト教の信仰を紹介しても、すぐに受け入れてもらえないかもしれませんが、偏見を取り払って自分の信じていることを改めて考えてもらえたら、福音のメッセージにも少しはオープンになってもらえるかもしれません。

人に受け入れてなくても大丈夫です。人はイエスのことも受け入れなかったのですから。

人に拒絶されたなら、それは、イエスとイエスの愛を拒絶していることなのです。

## 2. イエスは、弟子たちを拒絶体験に備えられる。(7-13節)

イエスは故郷の人々に受け入れてもらえない体験をした後、弟子たちをふたり一組で送り出されます。

イエスが弟子たちを遣わされたことについて、いくつか具体的な事柄が記されています。

- a) イエスは、弟子たちに汚れた霊を追い出す権威をお与えになりました。
- b) イエスは弟子たちに、杖以外は旅のために何も持っていけないようにとおっしゃいました。食べ物もお金もカバンさえも持っていけません。
- c) イエスは弟子たちに、ひとつの家に滞在して、そこから働きをするようにとおっしゃいました。家を転々としてはいけません。
- d) イエスは、弟子たちが受け入れてもらえなかったり、話を聞いてもらえなかったりした場合は、その人々に対する証言として、足の裏のちりを払い落とすようにとおっしゃいました。
- e) イエスは弟子たちに、人々が彼らのメッセージを拒絶したなら、神がソドムとゴモラを裁かれたように彼らを将来裁かれるとおっしゃいました。

弟子たちはイエスの言いつけに従い、人々に悔い改めるように教えました。

また、悪霊を追い出し、病人に油を塗って癒しました。

では、イエスが弟子たちを訓練なさったこの個所から何を学ぶことができるでしょう。

まず、私たちはイエスが弟子たちを訓練なさったのは、イエスが地上を去られた後にイエスの働きを継承させるためであることを理解しなければなりません。

彼らは、使徒の働きを与えられたのです。

つまり、現在、キリスト教会として知られる存在の基礎を作る働きです。

イエスが起こされた奇跡は、イエスが神であられることを示します。これは、イエスが神の御子であることの証です。

弟子たちが起こした奇跡は、イエスのメッセージと弟子たちのメッセージが同じであることを証明するものです。

奇跡は、イエスが弟子たちに授けられた力によって起こりました。

7節に、「彼らに汚れた霊を追い出す権威をお与えになった。」とあるとおりです。

弟子たちの働きを中心は、人々に悔い改めるように教えることでした。

いくら悪霊を追い出したり、病気を癒したりしても、人々が結局地獄に落ちてしまったら意味がありません。

ですから、「悔い改め」を教える福音のメッセージが、この訓練のテーマでした。

「悔い改める」とはどういう意味でしょう。また、私たちが生きる現代において福音を告げ知らせる上で、この模範に倣うとはどういうことでしょうか。

「悔い改める」と訳された原語のギリシャ語の単語は、「方向転換して別の方向に進む」という意味です。

何かについての考えを改め、その結果、行動も変わるということです。

自分の罪を認めるだけでなく、それについて行動を起こすことです。

ルカの福音書 15 章には、イエスのたとえ話があります。

ルカ 15 : 11-24

15:11 またこう話された。「ある人に息子がふたりあった。15:12 弟が父に、『お父さん。私に財産の分け前を下さい』と言った。それで父は、身代をふたりに分けてやった。15:13 それから、幾日もたたぬうちに、弟は、何もかもまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩して湯水のように財産を使ってしまった。15:14 何もかも使い果たしたあとで、その国に大ききんが起り、彼は食べるにも困り始めた。15:15 それで、その国のある人のもとに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって、豚の世話をさせた。15:16 彼は豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいほどであったが、だれひとり彼に与えようとはしなかった。15:17 しかし、我に返ったとき彼は、こう言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が大ぜいいるではないか。それなのに、私はここで、飢え死にしそうだ。15:18 立って、父のところに行って、こう言おう。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。15:19 もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。』15:20 こうして彼は立ち上がり、自分の父のもとに行った。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした。15:21 息子は言った。『お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。』15:22 ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。15:23 そして肥えた子牛を引いて来てほふりなさい。食べて祝おうではないか。15:24 この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。』そして彼らは祝宴を始めた。

これは、「悔い改め」がどういうことかを教えるすぐれたたとえです。

放蕩息子は自分の思いどおりの生き方をし、この世の快樂を求めて楽しみました。そしてお金を使い果たして友人もいなくなり、父親の使用人よりも貧しくなりました。

そうやって初めて、放蕩息子は自分のしてきたことがよくなかったことに気づきます。

彼はまず、自分の生き方について考え方を改めなければなりませんでした。

彼は 21 節で、神と父親とに対して犯した罪を告白しています。

こうして放蕩息子はふたたび家族に迎え入れられました。

あなたはどうでしょう。自分のやり方で生きても幸せになれない、心の深いニーズは満たされないと気づくところにあなたはたどり着きましたか。

気づくだけでは、救われませんし、平安も得られません。

イエスのもとに来て、罪を告白しなければなりません。

イエスだけが、私たちを救い、神の家族に迎え入れることがおできになります。

悔い改めは、古いいのちを捨てて、新しいいのちを受け取ることです。その新しいいのちとは、イエスと神のみことばである聖書に完全に従う生き方です。

私たち自身が悔い改めるまで、悔い改めを教えることはできません。

あなたはきちんと悔い改めができていますでしょうか。

クリスチャンになった後も、悔い改めが必要なときがあります。しかし、神の家族としての立場を失うことはありません。

### 3. 深刻な拒絶の一例 (14-29 節)

バプテスマのヨハネの頭がはねられた話をなぜこの時点でマルコがしたのか不思議に思う人もいるでしょう。

これはうれしい話ではありませんが、イエスに対する深刻な拒絶がもたらす結果の実例がここで挙げられています。

では、その内容を簡単におさらいし、私たちに当てはめて考えていきましょう。

- a) ヨハネはヘロデに悔い改めるよう呼びかけました。(18節) (しかし、ヘロデは悔い改めませんでした。)
- b) ヘロデヤは、ヨハネがヘロデに罪の悔い改めを呼びかけたことを嫌い、ヨハネを殺したいと思いました。(19節)
- c) ヘロデは、ヨハネが神の聖なる人だと気づいて、ヨハネを守りました。(20節)
- d) ヘロデは、ヘロデヤの娘に、何でも好きなものを与えると誓いました。(22節)
- e) 誓ったことと、プライドのせいで、ヘロデはヨハネを処刑せざるを得ない状況に追い込まれました。

この話の登場人物は全員、バプテスマのヨハネによる悔い改めのメッセージを拒絶しました。その結果、バプテスマのヨハネのいのちが犠牲となりました。

これは、イエスが受け入れられなかった話と、イエスが弟子たちを拒絶に備えられた話と関連しています。

## 適用

1. 私たちは、イエスがどういうお方であるかきちんと理解する必要があります。  
イエスは完全に神であり、完全に人間です。  
みことば全体からイエス・キリストについて学ぶのはすばらしい学びです。  
イエス・キリストについての教えをしっかりと理解する必要があります。聖書がイエスについて教えるすべてのことを理解することです。
2. 不信仰は、変わることを拒否することです。  
人がイエスを受け入れないのは、自分の生き方を変えたくないからです。しかし、それによってヘロデのような悲惨な結果をもたらす可能性があります。  
クリスチャンでない人は、悔い改めを拒むことで、私たち自身の人生にも何らかの影響があることを知る必要があります。
3. クリスチャンは、福音を携えて出かけられる状態でいなければなりません。同時に、受け入れてもらえないことも覚悟しなければなりません。人は私たちのことを拒絶するでしょう。けれども、それは悔い改めることを拒んでいるのであり、イエスを拒絶しているのです。それでも、たった一人の人がクリスチャンになるなら、十分に価値のある働きです。  
私に信仰について初めて話してくれた人は、85歳のおじいさんでした。彼は、私がクリスチャンになったことを知らないまま天国に行きました。  
人々に悔い改めるよう呼びかけることは、価値のあることです。